

5. オピオイド治療の目的

オピオイドは、鎮痛薬として周術期の管理、緩和ケア、非がん性慢性[疼]痛などの幅広い領域において痛みを緩和し、患者に多大な恩恵をもたらす。しかし、各領域のオピオイド治療の特徴が示すとおり（表5）、その使用目的、使用方法、注意点は領域ごとに全く異なる。

例えば、周術期の管理において、オピオイド鎮痛薬は、近年、術中のみならず術後痛に対しても積極的に使用されるようになっていく。術後痛へのオピオイドの投与は patient-controlled analgesia (PCA：自己調節鎮痛) に代表されるように、オピオイド投与のタイミングは患者中心であり、最大の注意すべき副作用は呼吸抑制である。オピオイド鎮痛薬の投与期間も数日と極めて短期間であるため、乱用・依存のリスクは低い。

また、緩和ケアにおいては、最近の医療従事者への積極的な教育によって、多くのがん患者がオピオイド鎮痛薬の投与を受けるようになっていく。がん性[疼]痛患者におけるオピオイド治療の特徴は、WHO 方式三段階除痛ラダーにあるように、痛みの強さに合わせてオピオイド鎮痛薬投与の開始や増量が決定されることである。オピオイド鎮痛薬の副作用がコントロール不能とならない限り、患者の満足が得られるまでオピオイド鎮痛薬が増量される。したがって、がん性[疼]痛のオピオイド治療においては、急激な増量を行わない限り、呼吸抑制や過鎮静といった深刻な問題はみられない。また、緩和ケアにおけるオピオイド治療の期間は、数週間から数カ月と限定されることが多く、乱用・依存といった問題が表出することは少ない。

一方、非がん性慢性[疼]痛におけるオピオイド治療は、術後痛やがん性[疼]痛とは全く異なる様相を帯びてくる。オピオイド治療の対象となる患者の多くが病院外での一般的な生活を営んでいること、目的が QOL の改善であること、投与期間が長期に及ぶことなど、オピオイド治療の継続にあたって多くの問題に直面する可能性が高い。その問題とは、嘔気、便秘、眠気などの副作用のように他の領域と類似するものから、高用量あるいは長期使用に伴うオピオイド誘発性腸機能障害、性腺機能障害、オピオイド誘発性痛覚過敏、

表5 各領域のオピオイド治療の特徴

	対象患者	投与期間	問題点
麻酔	手術を受けるすべての患者	限られた期間 (極めて短い期間)	呼吸抑制, 低血圧, 徐脈など
緩和ケア	がん性疼痛を訴えるすべての患者	限られた期間 (短～中期間)	嘔気・嘔吐, 便秘, 眠気
非がん性慢性[疼]痛	厳選された一部の慢性[疼]痛患者	予測不能な期間 (中～長期間)	嘔気・嘔吐, 便秘, 眠気, 腸機能障害, 性腺機能障害, 痛覚過敏, 乱用・依存

オピオイド使用障害（乱用・依存）など、非がん性慢性[疼]痛に特徴的なものまで幅広い。したがって、非がん性慢性[疼]痛のオピオイド治療においては、オピオイド鎮痛薬の役割の意味するところについて熟知する必要がある。オピオイド鎮痛薬の役割は痛みの緩和であるが、最終的な目標は非がん性慢性[疼]痛によって失った何らかの日常生活を取り戻すことである。非がん性慢性[疼]痛に対するオピオイド治療のこれまでの報告からは、オピオイド鎮痛薬は痛みを緩和するのみならず、食欲、睡眠、楽しみ、仕事など様々な日常生活を改善することが立証されている。その一方、オピオイド治療の方向性を誤ると、オピオイド鎮痛薬が患者の日常生活を害することもしばしばみられる。特に、痛みの緩和を追及し過ぎて、オピオイド鎮痛薬が高用量になった際に、オピオイド鎮痛薬による弊害が顕著になることが多い。そのため、非がん性慢性[疼]痛におけるオピオイド治療では、オピオイド鎮痛薬の処方是非がん性慢性[疼]痛に精通した経験豊富な医師が行い、処方を受ける患者は一定の基準を満たした患者に限定されるべきである。